

「間」不定期漫遊連載第5回あるいは迷走第2回 2002年6月24日執筆 7月刊行予定

岡倉天心のもうひとりの「お母さん」：シスター・ニヴェディータのことども

稲賀繁美 国際日本文化研究センター/総合研究大学院大学

今年は気が付くと岡倉天心インド旅行百周年とのことで、記念行事も行われるらしい。そんなお祭りとは丸で無関係な人間が、お呼ばれでもないのに便乗するのもはた迷惑だが。

『茶の本』(1906)で天心、岡倉覚三(1862-1913)が小泉八雲とともに高く評価したのが、『インド生活の綾』(1904)の著者、シスター・ニヴェディータ[献身]ことマーガレット・エリサベス・ノーブル(1864-1911)。アイルランド出身の彼女は、1898年以來、インドの宗教指導者にして近代ヒンディズム再興に力のあったヴィヴェカーナンダ(1864-1904)に帰依して、ベルールの僧院に身を寄せ、またカルカッタで女子教育の改良に挺身していた。天心のインド旅行のお膳立てをしたジョセフィーン・マクラウド(1858-1949)もまた、ヴィヴェカーナンダに帰依したアメリカ人富豪の娘で、当時ニヴェディータとは無二の親友にして文通相手となっていた。ヴィヴェカーナンダは1892年のシカゴ万国博覧会で併設開催された世界宗教会議において、伝説的な成功を収めていた。天心は本願寺の学僧、織田得能とも語り、第2回の国際会議を京都で開催することを夢見ており、インド旅行はヴィヴェカーナンダ師の招待交渉も兼ねていた。接見するや天心はヴィヴェカーナンダを「気迫学識超然抜群一代の名士」と見抜き、ヴィヴェカーナンダも「久しく失われていた兄弟と再会」したと感激した。

天心の夢想は同年夏、天心在印中のヴィヴェカーナンダの夭折により挫折する。だが天心はシスター・ニヴェディータとの出会いによって、『東洋の理想』(1903)さらには天心自らは「我らはひとつ」と題し、天使没後の1938年にまず日本語訳で『東洋の覚醒』として出版されることになる原稿の、理想的な校正者をも得ることとなる。天心とシスター・ニヴェディータとの関係は、けっして平穩でも円満でもなかったようだ。それでも天心は彼女のもとで、母に甘える悪戯小僧を演じて、それなりの精神的なやすらぎを得、周囲の信頼と敬意も勝ち得た。その様子は、ニヴェディータの書簡からも伺える。彼女の最初の著作『女神カーリー』(1901)からの感化は『東洋の覚醒』に明らか。逆に『インド生活の綾』には、天心との交流から得られた知見も散りばめられている。「内部からの勝利か、それとも外からの力による死か」との『東洋の理想』の末尾の一文は、そのままニヴェディータによって、インドにおける国民的理想実現の文脈で復唱される。また天心は、インド社会における女性の地位、その服従のうちに隠された東洋的な「自由」と自己犠牲による自己実現の様とを、ニヴェディータの著作や生活ぶりから、直に汲み取ったように見える。さらにヒンドゥー教確立にあつてシャンカラチャーリヤ即ち商羯羅阿闍梨の果たした役割を高く評価する天心の見解も、ラーマクリシュナ(1836-86)に溯る思潮の影響下に理解できよう。個人主義に基礎をおく西洋に比べて徳性において東洋が優位に立つとは、本質論的な東西対比論であり、今日からみれば確かに危険な思想ではあろうけれど、天心とニヴェディータとが共に慈しんだ信念でもあった。

1904年に『インド生活の綾』が出版される。綾とは網の目であり、織物の縦糸と横糸の交錯を意味し、インドの文脈ではナーガ龍の作る、この世という迷妄に張り巡らされたマーヤーの蜘蛛の糸でもあれば、また仏典の経文の刻むの絡み合い、さらにはそうした精神と物質の重ね合わせのうちに織り上がる、世界という綴れ織りをも、比喩として指している。この著作は、今までの学者によるこちたき解釈や、キリスト教宣教師たちによる教条的なインド蔑視を打ち破り、時代を画する名著として評価されるとともに、反対にミッシヨナリー系からは、薔薇色に染め上げられた架空にして理想化されたおセンチなインドの夢にすぎず、歴史的知識や思想的見識のお粗末は見るに耐え兼ねる、との酷評にも晒された。ラビンドラナート・タゴールは、著者の没後、1918年の版によせた序文で、インド社会のかかえる矛盾や欠点を見据えていながら、高飛車に批判を下す安易な態度を取らず、同情と愛とをもってインド社会を内部の理想に即して描きあげた著者独自の感受性に、格別の評価を下している。

実際、自分たちを論難するキリスト教宣教師たちの敵対の声のなかにも、神の聖なる声を聞き、教義による対立を煽るかわりに、すべての宗教はひとつの理想に通づる、と諭す近代ヒンディズムは、教条的キリスト教主義者にとって、格別やっかいな敵だったはずである。

そうした潮流にあって、ニヴェディータはヴィヴェカーナンダの死後、総督政府によるベンガル分割令の強行がスワデシ国民運動という抵抗運動を招くなか、仏教に言うダルマ=法をインドの正義 self-righteousness と読み替えるラーマクリシュナ以来の解釈を徹底し、とりわけ美術に、国民意識形成の機能を認め、反イギリス国民主義運動をインド亜大陸に広める「母」なる役割を担ってゆく。カルカッタ美術学校校長のアーネスト・ビンフィールド・ハヴェル(1869-1937)やアナンダ・K・クーマラスワミー(1877-1943)といった初期のインド美術研究者のみならず、アビンドラナート・タゴール(1871-1951)、ナンダラル・ボース(1883-1966)、スレンドラナート・ガングリーらの画家たちも、天心や、天心が1903年にインドに派遣した横山大観(1868-1958)、菱田春草(1874-1911)ら日本人画家との交流から、ベンガルの近代美術確立への夢を共有していった。その背後には、ニヴェディータによる個人的な勇気づけと、彼女の美術批評による着実な啓蒙活動があったことは、否定できない。

ニヴェディータが晩年10年間に公表した美術批評を繙いてみよう。アビンドラナート・タゴールの《ブハラ・マータ》(1906頃)には、インドの国民意識の高揚をみる、新しい母なる神の造形の誕生する様が認められる。また、ナンダラル・ボースの《サティ》(1907年頃)には、ともすれば欧米人からインドにおける女性被差別と隷属の証拠とされてきた殉死の習慣を擁護して、そこに死を越えた献身の理想と、恐れを知らぬ東洋の女性の無私なる徳の優位の証拠とが探られ、インドならではの女性の栄光の胚胎が、雄弁に言祝がれる。またスレンドラナート・ガングリーの描く歴史画、《1203年ラクシマン・センの逃亡》には、モンゴルの侵入をまえに逃亡を余儀なくされる老王に託して、また再び栄光へと振り返り咲くであろう、未来のインドの復興が歌われ、暗に現下のイギリスによるインド支配の不当性が告発される。

そのシスター・ニヴェディータの『東洋の理想』序文にもみられるインドの有機的な一体論は、岡倉天心の「アジアはひとつ」の呼び声と完璧に平仄を合わせた同時代の政治的メッセージであった。それは、1906年のベンガル分割令以降、さらに現実的な政治的目標インドはひとつたるべしへと変貌した。のみならず、現下の失われた政治的統一を克服し、国民としての再生を希求する訴えは、『バガヴァード・ギーター』に見える予言によって裏打ちされていた。「ダルマが滅び、アダルマが蔓延るたびに、我は顕示することだろう。善を守り、悪を破るために」。そしてニヴェディータのいささか恣意的な英訳によるならば、インドの「国民としての正義を達成するために」―あたかも自らの涅槃を犠牲にしても、諸衆の、そして最後の原子の一粒に至るまでの解脱を優先させようとした、弥勒菩薩のように。

岡倉天心にとって、インドのもうひとりの「母」であり、「弥勒」でもあった女性は、当時は治癒不可能だった赤痢感染のため、1911年尚早の死を迎える。だが彼女はその肉体の滅亡を越えて純粋に昇華され、戦後独立を遂げたインドの、「民衆の母」たる超人的-神話的次元をも担ってゆく。インドにおける岡倉天心は、没後のニヴェディータを包んだこの精神的な向背の中に位置付けることで、はじめてその思想史的な射程の幅を復元されることだろう。

□